第23回言語教授法・カリキュラム開発研究会　全体研究会
「外国語教授法の新たな試み」

甲南大学　国際言語文化センター
『言語と文化』第12号（2008年３月）抜粋

第23回言語教授法・カリキュラム開発研究会
全体研究会「外国語教授法の新たな試み」

第23回言語教授法・カリキュラム開発研究会全体研究会は，「外国語教授法の新たな試み」というテーマで2007年７月７日（土）午後１時30分から511講義室で開催され，62名の参加者があった。

◆　開催日時　　2007年７月７日（土）　13時30分～16時30分

◆　受付時間　　13時～

◆　開催場所　　甲南大学５号館　１階511講義室

◆次　　第

13：30～　　開会の挨拶　　国際言語文化センター所長　教授　胡 金定

＜第１部＞

13：40～「シャドーイング：過程を意識させる『リスニング指導法』」

神戸市外国語大学教授　玉井　健

昭和53年から神戸市立兵庫商業高校と葺合高校で15年間教鞭をとられ，その後，四国学院大学，神戸松蔭女子学院短期大学を経て神戸市外国語大学へ。現在，神戸市外国語大学国際関係学科および大学院英語教育学専攻教授。博士（学術）。
研究分野：リスニング指導法としてのシャドーイング研究／リフレクティブ・プラクティスをベースにした教師教育
著書：『リスニング指導法としてのシャドーイングの効果に関する研究』ほか

司会　　国際言語文化センター准教授　伊庭　緑

15：00～　　休　憩

＜第２部＞

15:10～　　パネルディスカッション「フランス語・ドイツ語教育をめぐって」

「インターネットとパソコンの活用法」

国際言語文化センター教授　中村　典子（フランス語）

「フランス語教育におけるコミュニケーション能力習得アプローチ

（approche communicative）」

国際言語文化センター准教授　ディディエ・シッシュ（フランス語）

「自律的学習者の養成のために」

国際言語文化センター准教授　藤原　三枝子（ドイツ語）

「英語教育の立場から」

神戸市外国語大学教授　玉井　健（英語）

15：50～　全体討論・質疑応答

司会　国際言語文化センター講師　石井　康一

16：20～　閉会の挨拶　国際言語文化センター教授　中村　耕二

16：45～　懇親会　甲南大学生協３階バンケットルーム

第１部　講演

「シャドーイング：過程を意識させる『リスニング指導法』」

神戸市外国語大学教授　玉　井　　健

教室では今，様々なリスニング指導法についての模索が行われ，その中でシャドーイングについての関心が高まっている。シャドーイングの第一人者玉井　健先生にリスニングのメカニズムとの関連においてお話いただいた。前半はリスニングとシャドーイングの接点など理論的な解説を，後半は用意していただいた英文を実際に参加者が時間を計ってシャドーイングし，玉井先生から教室で応用する際の注意点などをうかがった。

シャドーイングを「聞こえてくるスピーチと同じ発話をほぼ同時に口頭で再生する行為」，リスニングを「聞こえてくる音声をとらえて意味理解をし，必要な情報をとること」と定義する時，シャドーイングとリスニングの関連はどこにあるか。リスニング力は大別すると，語彙・文法・音韻・一般的知識などの知識面の能力と，音声をとらえてしばらく保存しながら処理する認知・処理能力の２つに分けられるが，シャドーイング訓練は，後者の方に積極的に光をあてる指導法といえよう。

一般のリスニングでは，すべての語を聞き取るというような聞き方はしない。聞き取った内容語をつなぎ合わせて意味を推測する。一方シャドーイングは前置詞や冠詞に至るまですべてを再生する非日常的な聞き方であるが，その過程で英語音への注意力が向上することが期待できる。正確で速い復唱技術の習得は，音韻ループ上の音声情報を増やし，意味理解の精度を向上させる。音韻データベース構築という点については，英語教育ではほとんど有効な働きかけを行ってこなかったし，運動的な訓練で認知技術を高めるといったことは指導の視野にさえ入っていなかった。シャドーイングには，文法や語彙などの言語知識を短期間に増やす効果は期待できないが，聞いた音声の復唱技術，より速く音にする技術，あるいはそれらを可能にすると思われるプロソディ認識技術の向上と英語音声データベースの構築によって，リスニングを助けると考えられる。

実践的な面のアドバイスについては以下の通り。

１）シャドーイング教材は教科書付随の音声教材が最初の選択になるだろうが，生の会話や，映画・スピーチ・インタビューもお勧めできる。スピードは110語／分程度から始め，慣れるにつれてスピードをあげ，１年経つ頃には180～220語のものを扱う。

2）声を出すのが苦手な学生には小さな声でブツブツと呟くように行うマンブリング，口元は多少動かしても，声に出さずに行うサイレント・シャドーイングを使い分ける。

3）音声を聞きながらテキスト（原稿）を読むシンクロ・リーディングも取り入れる。発音の良し悪しよりも，とにかく遅れずについていく，そして全部口に出して音読できることを目指す。

また音か意味どちらを優先させるかという問題については，音の把握を最優先とする。シャドーイングの目的は意味把握ではなく，正確な復唱技術を身につけることと考えるならば，最初から意味は提示する。正確な音の再生を意識したシャドーイングをプロソディ・シャドーイング，意味を追いながら行うシャドーイングをコンテンツ・シャドーイングと言う。前者を中心に授業を組み立てて，だいたいの学生が慣れた段階で後者を仕上げに用いる。

会場は終始なごやかな雰囲気で，シャドーイングの理論と実践を楽しみながら理解できた。質疑応答も活発に行われた。

（文責：伊庭　緑）

第２部　パネルディスカッション
「フランス語・ドイツ語教育をめぐって」

「インターネットとパソコンの活用法」　フランス語　中村　典子

フランス語の中級・上級の授業で現在，実践している方法を紹介した。

（１）≪インターネット翻訳サイトの活用法≫：まず，Googleの「言語ツールバー」を利用し，フランス語のweb pageを英語に自動翻訳し，概要を掴む手法を示した。中級学習者がフランス語のサイトを選択するための一助となろう。各自の関心に沿って選択したフランス語のサイトは，じっくりと解読させ，Power Pointを使用して「フランス語と日本語の混在するスライド５枚以上」にまとめて，授業中にプレゼンテーションさせる。［中級Ⅳの分担授業の枠内，90分授業の４回目で発表させるので，各自の自律学習が要求される。］

（２）≪インターネットで得るフランス語の現地情報≫：現地で頻繁に使われている複数のサイトを紹介した。中級の授業では，「一週間のパリ滞在」を想定し，訪れたい美術館等の位置，現地周辺の具体的な情報を調べた上でホテルを決める，という「プロジェクト型学習」に活用している。

（３）≪パソコン上での音声ファイル・映像ファイル活用法≫：Windows Media PlayerやWin DVD5に付いている「タイムストレッチ機能」を利用し，CDの音声ファイル，DVDの映像ファイルの再生速度を変更して「聞き取り能力」向上に役立てている具体例を示した。

こうしたICT（Information and Communication Technology）の利用は，外国語学習者の自律学習において貢献するところが大きい。今後も，さまざま活用法を提案していきたい。

（文責：中村　典子）

「フランス語教育におけるコミュニケーション能力習得アプローチ」
フランス語　Didier CHICHE

従来型のフランス語教材は文法中心で，読解力や翻訳力は身に付くが，コミュニケーション能力の養成に欠けているといえよう。一方，コミュニケーション・アプローチは，言語の細部の知識より行動力を優先し，具体的な状況での適切な語彙や表現を覚え，ロールプレイなどをする。ヨーロッパではこちらが主流で，「ヨーロッパ共通参照枠」が作られ，これに沿ったTCF（フランス語能力テスト）は，受験者のコミュニケーション能力を１から６のレベルで評価する。ただ，コミュニケーション能力があっても，言葉としては不正確で覚えたことをすぐ忘れてしまうリスクもあるので，コミュニケーション・アプローチと従来型の学習を組み合わせることが不可欠である。

（文責：Didier Chiche）

「自律的学習者の養成のために」　　ドイツ語　藤原　三枝子

近年，教師の役割に関する考え方が変わってきた。知識を注入することよりも，学習者が将来にわたり，我々教師の手助けがなくとも自主的に活動できるように，彼らの自律性を養成することが本来的な役割である，という学習観のパラダイム転換である。教科書においても，徐々に，「発見的な学習」や自分なりの「学習方略」の習得がコンセプト化されるようになってきた。47カ国が加盟するヨーロッパ評議会が強力に導入を推し進めている「言語ポートフォリオ」も，学習者が自分の言語習得を自律的にマネージするためのツールなのである。

（文責：藤原　三枝子）